

第二十六回国際軍事史学会参加報告

林 吉 永

一 はじめに

第二十六回国際軍事史学会は、平成十二年七月三十日（日）から八月四日（金）までの六日間、「総力戦」という共通テーマでスウェーデンの首都ストックホルムにおいて開催され、また、九日（水）には、場所をノルウェーの首都オスロに移して国際歴史学会が開催された。今回はミレニアムということもあり、二〇世紀の戦争を象徴するキーワードとされる「総力戦」をテーマとして取り上げ、二〇世紀の戦争を総括することが大会の目的であった。前回のベルギーでの国際軍事史学会には、当時の国際情勢等を反映して、中国・ロシアからの参加者がいなかったが、今次大会にはこの両国を含め三二カ国から約二〇〇名が参加した。日本からは、今村伸哉日本文化大学教授、堅田義明光陵女子短期大学助教授、秋谷昌平防衛研究所図書館長、石津朋之同研究所戦史部主任研究官、そして筆者の五名が参加した。

防衛研究所戦史部が国際軍事史学会に参加する目的は、学会を通じて防衛研究所が実施する調査研究業務のレベルアップに供する資を得るとともに、各国の、特に軍事史研究者との対話を積極的に図り、関係交流を含め人脈を構築し国際交流基盤を拡大することである。また、国際軍事史学会での資料等を収集し、近い将来、日本における学会開催実現の資とすることも目的として挙げられる。

周知の通り、国際軍事史学会は一九七三年に創設され、ベルギー王国の首都ブリュッセルに本部を置いている。加盟国は、現在三五カ国であり、日本は軍事史学会を母体とする「日本軍事史研究評議会」名で一九七六年に加盟している。国際軍事史学会の主要活動の一つが、今回のような年次大会の開催である。年次大会は加盟各国の持ちまわりで開かれているが、残念ながらアジアでは、一九八六年に韓国で開催されたのみである。

国際軍事史学会の日本での開催に関しては、第二十二回大会において議論されたが、年次大会の開催経費の捻出と国や自衛隊の支援確保が困難なこと、言語の問題、および、日本が加盟国からみて遠隔地であることなどの理由で実現は困難であるとの結論を得た経緯がある。

二 大会日程の概要

ストックホルム（スウェーデン）での第二十六回国際軍事史学会の日程概要は以下の通りである。

七月三十日 午後——受付・登録、夜——ヴァーサ号博物館にてスウェーデン軍事史学会主催レセプション

七月三十一日 午前——開会式、来賓講演ならびに研究報告、午後——研究報告、夜——ストックホルム市内見学

八月一日 午前——研究報告、昼食——ストックホルム市庁舎での同市主催歓迎レセプション、午後——研究報告

八月二日 第一次世界大戦時に構築されたフィヨルド沿岸防衛要塞跡見学

八月三日 午前——研究報告、午後——研究報告、夜——国立軍事博物館での同博物館主催レセプション

八月四日 午前——研究報告、午後——総会、夜——スウェーデン軍士官学校での国防大学校主催レセプションおよび閉会式

なお、先述のように、ストックホルムでの国際軍事史学会に引き続き、オスロでも国際歴史学会が開催された。国際歴史学会においては、歴史研究の効果および影響に関し、各分野別に実施される議論を通して、歴史認識のあり方を学ぶとともに、防衛研究所が行う戦史に係わる調査研究およびリファレンス業務の改善向上の資を得ることが目的とされた。国際歴史学会については後述するが、本稿では紙幅の都合上、ストックホルムでの国際軍事史学会の報告を主とする。

三 研究報告の概要

研究報告は四一組が行った。全体的な傾向として、ヨーロッパ地域の「総力戦」に関連する報告が多かったが、北米はいうまでもなく中南米、さらにはアジアやイスラエルに関する報告は異彩を放ち、とりわけ興味深かった。各国の総力戦に対する関心度は極めて高く、その意味で日本での無関心さが逆に目立つこととなった。

総力戦思想に包含される諸要素は膨大であり、なおかつ複雑多岐である。筆者は、改めて総力戦を整理・体系化し、日本の安全保障戦略と絡めて再考察するとともに、アメリカとの協調を前提とする戦略概念を構築する必要性を強く実感した。防衛研究所が現在及び将来の日本の安全保障政策に寄与する意識を育て、常時

維持するという責務を再認識するならば、本命題は緊要の課題であり、緊急にアプローチすべきであり、今次大会の諸発表を活用すべきであるとの意識が育った。

各報告者名(国籍) および表題は次の通りである。

七月三十一日

午前 「総力戦」——その軍事ドクトリンと軍事計画への影響

マイケル・ハワード(イギリス) 「総力戦序論」

モーリス・ファヴレ(フランス) 「総力戦総論」

ルドルフ・ヤーン(スイス) 「総力戦」

レイモンド・ルラギ(イタリア) 「フランス革命からアメリカ

独立戦争にいたる総力戦の原点」

ニコラス・デパスタス(ギリシャ) 「歴史に学ぶ総力戦」

午後 「総力戦」——その軍事ドクトリンと軍事計画への影響

ブライアン・ボンド(イギリス) 「クラウゼウィッツとリデル

ハートの総力戦思想」

石津朋之(日本) 「日本における総力戦の概念」

ジェフリー・ワウロー(アメリカ) 「一八七〇年〜一八七一年

のフランスの危機管理の失敗理由」

八月一日

午前 「総力戦」——その軍事ドクトリンと軍事計画への影響

ヤオ・ツエン・イ(中国) 「総力戦と中国の人民戦争」

ブライアン・リン(アメリカ) 「一八九八年〜一九四一年の米

陸軍の総力戦態勢整備」

ベンハルト・クロナー(ドイツ) 「ドイツにおける総力戦の

戦争指導」

M・マイツェル(イスラエル) 「イスラエルの防御から攻撃へ

のドクトリン変化」

オラフ・リステ(ノルウェー) 「総力戦・総力防衛概念」

A・シュミー(スイス) 「専守防衛総力戦」

ヒューゴ・オドンネル(スペイン) 「一九世紀末の植民地危機

とスペイン海軍」

R・ピロジ(フランス) 「ジュール・ヴェルヌと総力戦」

午後 徴兵制度の役割と非職業軍人の興亡

R・エッガー(オーストリア) 「一七七一年〜一七八一年の徴

兵制度」

ジョーセフ・ザッハー(ハンガリー) 「近代徴兵制度の確立期」

ウラジミール・セーゲス(チェコ) 「ナポレオン時代の徴兵制度」

ハンス・クリスチャン(デンマーク) 「一七八八年〜一八四八年のデンマークの農民徴兵制度」

I・ルーカス(ギリシャ) 「一九世紀〜二〇世紀におけるギリシャの総力戦」

D・キャロル(アイルランド) 「一九三九年〜一九四五年のアイルランド防衛とその社会的特性」

八月三日

午前 徴兵制度の役割と非職業軍人の興亡

アウレリオ・モーラ(ブラジル) 「パラグアイ戦争時の動員」

フィリップ・ブランゲ(フランス) 「第一次世界大戦の徴兵制度」

ラルス・エリクソン(スウェーデン) 「スウェーデンの軍事と国家」

午前 経済戦争と産業の動員

ナヴィオ・ブランコ(スペイン) 「一八世紀末の北部スペイン

地方の産業力動員」

L・ヒルバート(ドイツ) 「英・仏・独の対立関係と武器輸出」
堅田義明(日本) 「一九三〇年代の日本海軍と経済」

D・プレダ(ルーマニア) 「第一次世界大戦への経済的動員」

午後 「銃後」の役割

ビクトル・エンソーヴェン(オランダ) 「総力戦とその代償」

C・タスキラン(トルコ) 「露土戦争における総力戦」

F・ポールマン(ハンガリー) 「第一次世界大戦初期における対セルビア政策」

M・ヴァイニング(アメリカ) 「第一次世界大戦における女性兵士」

T・パネツキー(ポーランド) 「独ソによるポーランド侵攻」

アントニオ・ビスポ(ポルトガル) 「戦争における介入問題」

八月四日

午前 「総力戦」——その抑制要因と長期的影響

C・パオレッティ(イタリア) 「冷戦時における核抑止力」

M・レオナルデイス(イタリア) 「冷戦という名の総力戦」

アーウィン・シュミードル(オーストリア) 「植民地独立戦争と低強度紛争」

R・ポムメリン（ドイツ） 「西ドイツにとつての核戦争」

A・コモロウスキー（ポーランド） 「第二次世界大戦とバルト海への影響」

ウラジミール・ゾラレフ（ロシア） 「ロシアと総力戦」

また、七月三十一日には、スウェーデン国防大臣の挨拶（代理）があり、二〇世紀の「総力戦」の時代を回顧するとともに、同日のC・M・シュルテン国際軍事史学会会長（当時）の挨拶では、人類の宿命としての戦争を研究する意義が強調された。同時に、諸事情で前回の大会を欠席したロシアと中国の今次大会への出席を歓迎する旨が述べられた。

国際会議としての本大会のレベルは、参加している研究者の知名度・実力、その国における地位および影響力、主催国（スウェーデン）の国を挙げての運営、使用施設・設備、ホスピタリティー等、極めて高いものと観察できた。国際軍事史学会で発表の機会を得、高い評価を得ることは発表者の所属する組織のレベルを誇示することにも繋がり、国際的な信用を勝ち取ることに寄与するものと思ふ。その意味で、戦史部石津朋之主任研究官が英国留学時に師事したマイケル・ハワード教授ならびにブライアン・ボンド教授の推薦を得て発表できたことは喜ばしい。

重ねて、日本における総力戦に係わる調査研究が、総合的かつ

体系的な指針のもと積極的な研究テーマとして取り上げられるムードが希薄な現状に鑑み、防衛研究所の任務の重さを痛感した。

四 戦跡見学等の研修

今次大会では前大会でのワートルローやイーブルのような戦跡（古戦場）見学はなかったものの、八月二日には、第一次世界大戦から第二次世界大戦に至るまでの期間、ストックホルムに対する海路からの敵の侵入を阻止するために構築されたフィヨルド要塞跡を一日がかりで見学した。ここでは、スウェーデンが今日に至るまで、フィヨルド洞窟を利用した潜水艦基地を有していること等、いわゆる中立国として本土防衛に創意工夫を凝らしている姿勢の一環を実体験できた。

また、七月三十日には有名なヴァーサ号博物館を訪問し、一九六一年に海底から引き上げられ復元された一七世紀の戦艦、ヴァーサ号を見学することができた。一七世紀建造の木造戦艦ヴァーサ号は、現在博物館として公開されており、スウェーデンの誇る戦史記念として国民に開放し、歴史認識に供している。

さらには、大会日程にストックホルム市内観光、国立軍事博物館見学、ストックホルム市庁舎見学、そして、軍隊の野外炊飯食の体験等が組み込まれており、非常に意義深い大会であった。国立軍事博物館は、戦時の市民生活、被侵略時の侵略軍の蛮行、拷問、収容所の状況、軍隊の状態等、主として戦争の悲惨さを訴え

る蠟人形を使った展示、武器・装備品展示、戦闘の様相、城砦・陣地、軍用機・船舶、文献史料の展示があり、平和と国土防衛には犠牲を伴うこと、国民全てが戦争について認識すべきこと、先人の犠牲のうえに現在があること等を啓発・学習する内容となっている。周知の通り、ストックホルム市庁舎は、ノーベル賞授賞式、同晚餐会会場としても有名である。また、フィヨルド要塞見学時の昼食、軍事博物館見学時の夕食にそれぞれ携行食、野外炊飯食を体験でき、有意義であった。

五 第十九回国際歴史学会参加概要

国際軍事史学会に引き続き、オスロ（ノルウェー）で国際歴史学会が開催された。国際歴史学会は参加者が二〇〇〇名を超え、内容も多岐にわたるため、本稿では軍事史部門のセッションに記述を絞り、以下、その概要を記す。

ノルウェー防衛研究所で実施された軍事史部門のセッションには、約二〇〇名が出席、セッション開始後に室外の中庭にまで座席を並べるほど、多くの専門家が参加した。共通テーマは、「第二次世界大戦後の情報——組織、任務、国際協力」であった。

第一セッション

マイケル・ハーマン（イギリス）「英国統合情報委員会の役割」
ケニス・マクドナルド（アメリカ）「CIA情報活動を通じての教訓」

第二セッション

オレグ・ツァーレフ（ロシア）「冷戦期ソ連の情報活動」
ウルガン・クリーガー（ドイツ）「第二次世界大戦以降のドイツの対外情報活動」
イーガル・シェファイ（イスラエル）「イスラエルの情報活動と安全保障観」

第三セッション

ウエズリー・ウォーク（カナダ）「第二次世界大戦後のカナダの情報活動」
フランク・ケイン（オーストラリア）「第二次世界大戦後の情報活動の進展」

第四セッション

オラフ・リステ（ノルウェー）「外交史における情報の側面」
シース・ヴィーベス（オランダ）「オランダの情報活動」

第五セッション

ドナルド・ワット（イギリス）「情報活動——総括」

また、国際歴史学会では戦跡見学として、オスロ・フィヨルド

要塞、フレデリック・スタッド、国立陸軍博物館を訪問した。第一次世界大戦から第二次世界大戦に至る期間、オスロ防衛拠点(最終ライン)として堅固な岩盤と重厚なコンクリート障害物を利用した要塞が網の目の如く構築されていた。このフィヨルド要塞は、装備が近代化され現在でも使用されている。フレデリック・スタッド(要塞都市)は、函館の五稜郭を彷彿とさせる都市構造の要塞であり、現在も士官学校が所在する。国立陸軍博物館は、中期以降の兵器の展示が中心の博物館であった。

前述したように、国際歴史学会の規模は極めて大きく、全てのセッションに参加することは無理であったが、興味深い発表が多かった。但し、内容的には欧米主導のものが多く、ここでも日本からの発信、とりわけ防衛研究所戦史部からの活発な参加が望まれる。

六 おわりに

国際軍事史学会の今後の予定だが、次回(第二十七回)国際軍事史学会は二〇〇一年八月十九日から二十五日にかけて、アテネ(ギリシャ)において開催される。共通テーマは「武力紛争と二〇世紀地政学」である。また、二〇〇二年の第二十八回大会はアメリカで開催される予定である。防衛研究所戦史部の研究者ならびに軍事史学会会員が、国際軍事史学会に積極的に参加し、かつ、発表を行うことを強く期待する。